

川 高 遺 跡

沼田川河川総合開発事業（福富ダム）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書（3）

2004

財団法人 広島県教育事業団

川 高 遺 跡

沼田川河川総合開発事業（福富ダム）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書（3）



福富町位置図（・は遺跡の位置を示す）

2004

財団法人 広島県教育事業団

例 言

- 1 本報告書は平成15(2003)年度に調査を実施した沼田川河川総合開発事業(福富ダム)に係る川高遺跡(賀茂郡福富町大字久芳字平原9-4所在)の発掘調査報告である。
- 2 発掘調査は広島県東広島地域事務所との委託契約により財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室が実施した。
- 3 発掘調査は青山 透, 山田繁樹が担当した。
- 4 出土遺物の整理・復元・実測・図面の整理・写真撮影は, 青山・山田が中心となって行った。
- 5 本書の執筆・編集は山田が行った。
- 6 本書で使用した遺構の表示記号は次のとおりである。
SB:住居跡, SD:溝
- 7 図版と挿図の遺物番号は同じである。
- 8 本書で使用した方位は第1・2図を除いて, その他はすべて磁北である。
- 9 第1図は国土地理院発行の1:25,000の地形図(乃美)を使用した。



本文目次

1	はじめに	(1)
2	位置と環境	(2)
3	調査の概要	(6)
4	遺構と遺物	(9)
5	まとめ	(14)

挿図目次

第1図	周辺遺跡分布図 (1:25,000)	(3)
第2図	遺跡周辺地形図 (1:2,500)	(7)
第3図	遺構配置図 (1:150)	(8)
第4図	S B 1 実測図 (1:60)	(9)
第5図	出土遺物実測図 1 (1:3)	(10)
第6図	出土遺物実測図 2 (1:4)	(11)
第7図	S D 1 実測図 (1:60)	(13)

図版目次

図版 1	a 調査前遺跡遠景 (北から)
	b 調査前遺跡遠景 (南西から)
	c 検出状況 (東から)
図版 2	a S B 1 遺物出土状況 (西から)
	b S B 1 遺物出土状況 (北東から)
	c S B 1 遺物出土状況 (北東から)
図版 3	a S B 1 完掘状況 (北東から)
	b S D 1 土層 (北から)
	c S D 1 完掘状況 (北から)
図版 4	a 完掘状況 (北西から)
	b 調査後近景 (南東から)
	c 調査後遠景 (東から)
図版 5	出土遺物 1
図版 6	出土遺物 2

1 はじめに

川高遺跡の調査は、沼田川河川総合開発事業（福富ダム）に係わるものである。

福富ダムは、二級河川沼田川水系沼田川の洪水調節及び既得取水の安定化、河川環境の保全と都市用水の供給を目的として、平成20年度の完成を目標に計画された多目的ダムである。本事業に係って、広島県東広島土木建築事務所（現広島県東広島地域事務所、以下「東広島事務所」という）は事業予定地内の文化財等の有無および取り扱いについて平成5年11月4日付で広島県教育委員会（以下県教委という）に協議した。県教委は平成12年9月20日付と平成14年8月2日付で福原城跡ほか、遺跡の有無を確認するための試掘調査が必要な箇所がある旨を回答した。

川高遺跡については、県教委が平成14年9月12日に試掘調査を実施し、当該予定地に遺跡が存在していることを確認した。この取り扱いについて県教委と福富町教育委員会及び東広島事務所の3者で協議を重ねたが、遺跡の現状保存は困難であるとの結論に達し、記録保存の処置をとることとなった。これを受けて東広島事務所は県教委に対し平成14年12月16日付で土木工事の通知を行い、県教委は平成14年12月27日付で工事着手に先立って発掘調査が必要である旨を通知した。東広島事務所は、翌平成15年1月15日付で財団法人広島県埋蔵文化財調査センター（平成15年4月1日より、財団法人広島県教育事業団埋蔵文化財調査室が業務を継承。以下「事業団」という）に発掘調査を依頼した。事業団ではこれを受けて5月23日付で埋蔵文化財発掘調査の届出を県教委に提出した。東広島事務所と事業団は5月8日付で委託契約を結び、6月2日～6月20日までの3週間にわたり発掘調査を実施した。

本書は以上のような経緯のもとに実施した発掘調査の成果をまとめたものである。今後の埋蔵文化財の資料として、また、当該地域の歴史の一端を知る助けとなれば幸いである。なお、発掘調査にあたっては、広島県東広島地域事務所、福富町教育委員会及び地元の方々から多大なるご協力を得た。記して感謝の意を表します。

2 位置と環境

川高遺跡は、賀茂郡福富町久芳字平原9-4に所在する。

福富町は高田郡向原町と接して鷹の巣山（標高922m）をはじめ、金明山（735m）、野路（段原）山（731m）、板鍋山（757m）、といった700mを超える山々に囲まれている。こういった地勢から盆地状の地形となっており、谷あいを流れる河川は合流を重ね沼田川となり北西から南東に向かって町内を貫流し瀬戸内海（三原市）に注いでいる。また、源流域にあたるため、水源がそれほど豊かではなく、耕作地付近には灌漑用の溜池が大小を問わず数多く存在している。町の面積の内、森林と農用地とで約90%となり、農林業が基幹産業となっている。

本遺跡は沼田川が竹仁地区から大きく南に流路を変え、国道375号線沿いに南下している谷河内川と合流する地点を見下ろす南東側丘陵斜面に位置している。北西には福原城跡を望むことができ、北側下方は緩やかな斜面に開墾された棚田状の水田がある。

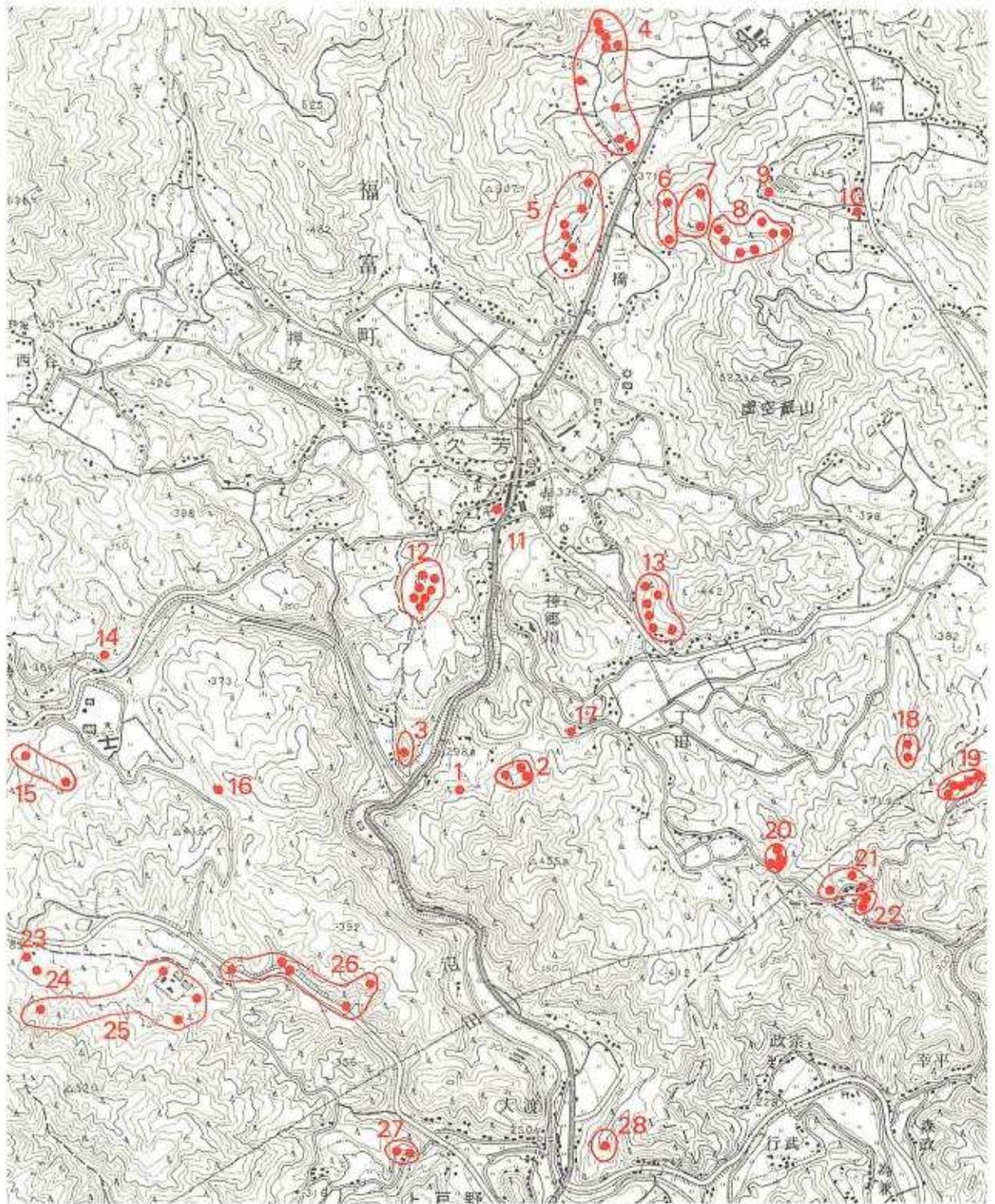
本遺跡周辺の歴史的な環境については、『広島県遺跡地図Ⅱ』やこれまでの町内で行われた発掘調査の成果を参考にしながら古墳時代を中心に概観してみたい。

福富町内での遺跡分布状況はほとんどが古墳を中心とする墳墓であり、集落関連の遺跡は調査例が少なく不明の部分が多い。

旧石器時代の遺構や遺物は確認されていない。金口古墳群（久芳）の調査は福富ダムに関連した金口地区総合開発事業にともなうもので、古墳以外に墳丘の基盤となっている包含層内から安山岩・流紋岩・黒曜石を石材とする縄文時代の石鏃・石錐・尖頭器・石匙などの石器類や剥片が41点出土している。形態や製作技術の状況から縄文時代でも比較的古い段階とされ、町内で最も古い遺物となり、集落遺跡の存在が想定される。

弥生時代になると明確な竪穴住居跡などは、確認されていないものの遺物の散布地などが数例あり、遺跡が増加しつつある様子がうかがえる。日曾木遺跡（久芳）は、本事業と同事業の調査が行われ、中期～後期にかけての竪穴住居跡2軒と段状遺構1基が確認されている。遺跡は福富中学校と沼田川を挟んだ北側の丘陵上の僅かな平坦面に立地し、1本柱という住居の上屋構造から非日常的な居住地であった可能性を指摘されている。他に十文字南1・2号遺跡（久芳）から石斧や土器片が出土しているほか、平が市遺跡（上竹仁）、正覚寺裏遺跡（久芳）などは土器の包含地として、竹仁遺跡（下竹仁）は遺物の出土と土坑が確認されている。

古墳時代の遺跡は古墳が中心となり、古墳の数は約80基、集落遺跡として1遺跡が確認されている。古墳はほとんどが横穴式石室を埋葬施設とする円墳で後期に属すると思われる。これらの古墳の内、下平古墳群（上戸野）は5基で構成される古墳群で石室石材が確認されておらず、特に第1号古墳は、町内唯一の前方後円墳（全長25m）であることから、他の古墳群より早く展開した可能性があり、埋葬施設として横穴式石室が導入される以前の古墳群のひとつとして注目される。上神古墳群（2基）（上戸野）のうち第1号古墳は箱式石棺が確認されている。松の木古墳



第1図 周辺遺跡分布図 (1:25,000)

- 1 川高遺跡 2 平原古墳群 3 福原城跡 4 小松東古墳群 5 小松西古墳群 6 後谷古墳群
 7 獅子城古墳群 8 松崎古墳群 9 松崎ため池遺跡 10 松崎遺跡 11 正覚寺裏遺跡 12 金口古墳群
 13 犬丸山古墳群 14 日曾木遺跡 15 二反田山古墳群 16 福富中学校裏古墳 17 民貞古墳 18 十文字古墳群
 19 杉風呂山北古墳群 20 丁田南古墳群 21 十文字南古墳群 22 十文字南遺跡群 23 竹仁古墳
 24 竹仁遺跡 25 西田河内古墳群 26 東田河内古墳群 27 松の木古墳群 28 貝峠古墳

群(2基)⁽⁵⁾(上戸野)は、報告によると平地からの比高が約60mの丘陵頂部の幅5～6m、長さ20cmの平坦地に径8m、高さ60～80cmの1基と8基の箱式石棺と2基の石蓋土墳墓が明らかにされ、墓域内からの遺物は無く丘陵東側先端部で鉄刀・鉄鑿が1点出土している。遺跡地図と照合すると丘陵先端部が第1号古墳で、報告で松の木古墳とされているのは第2号古墳となる。丘陵の頂部平坦面を埋葬地として選定し、明確な墳丘がなく埋葬施設が密集している状況と箱式石棺の測石を横長に使用している状況をみると、近年、調査が進み状況が明らかになりつつ東広島市で多く確認されている弥生時代後期に属する墳墓群の特徴と類似しており、松の木古墳群は弥生時代後期の墳墓群であった可能性も考えられる。金口古墳群⁽⁷⁾(久芳)は、6世紀前半期を中心とした7基で構成される古墳群で、町役場などがある町並みの中心地から南にひろがる丘陵頂部の平坦地に営まれていた。古墳は径11mの第1号古墳が最大規模で、径が4m～8mの古墳で箱式石棺と石蓋土墳を埋葬施設としている。出土品には須恵器や鉄剣・鉄鎌・鉄摘・「やりがんな」がある。これらの古墳は墳丘がほとんど残っておらず試掘時の石棺の確認により古墳の存在が明らかになっている。このような状況から町内には、横穴式石室でない前半期の古墳が未確認で存在している可能性は多いと思われる。

後期の古墳は直径10m、高さ2m程度の墳丘を持つ横穴式石室を埋葬施設とするものがほとんどで、久芳から豊栄町に至る道沿い、下戸野から竹仁に至る道沿いなど交通の要衝で谷間の平野部を見下ろす小高い場所や小さい谷の奥に築造されている。単独で存在する古墳は僅かでおおむね2基～10基程度で群を構成する例が多い。

丁田南古墳群⁽⁶⁾は4基の古墳で構成され、いずれも南東に開口する横穴式石室を埋葬施設としているが、石材はほとんど抜き取られていた。このうち、第3号古墳が発掘調査された。第3号古墳は、第1・2・4号古墳とは小さな谷を挟んで離れており丘陵先端部付近に立地している。墳丘はほとんど残っておらず、周溝から径7.5mの円墳であったことがわかる。石室は掘方底面から石材を広口積みにより構築され、玄室の幅と高さ(推定)は共に1m弱で、長さは残存長で4mの無袖式である。出土した須恵器から7世紀前半の築造とされている。福富中学校裏古墳⁽⁷⁾は本事業に伴って調査がされている。この古墳は急峻な丘陵斜面に単独で存在しており、墳形は長径約11m、短径が約9mの楕円形で、玄室の長さが6.6m、7.5m、幅1.6m、高さ1.9mの南西に開口する無袖式の横穴式石室を埋葬施設としている。石室入り口の左右には外護列石、墳丘上からは埋葬にともなう祭祀行為の痕跡と思われる須恵器・大甕が出土している。石室内からは原位置を保っていないものの須恵器・耳環・玉類、鉄器(馬具・飾り金具・鉄鎌・鎖尻金具・足金物)などの豊富な遺物が出土している。時期は6世紀後半から7世紀の初頭と報告されている。同時期の古墳としては規模が大きいことや単独で立地していること、豊富な副葬品から沼田川上流域のなかでも有力者層の被葬者を想定している。福富中学校裏古墳と同様に単独で存在する貝峠古墳⁽⁸⁾は、沼田川と支流の造賀川が合流する付近の北側丘陵頂部に立地している7世紀前半代の築造とされる古墳で須恵器の鳥形瓶が出土している。また、丁田南古墳群の辺りからは環状瓶が出土したと伝えられている。これらの須恵器は異形須恵器と称され、沼田川中流域から上流域を中心に分布

がみられるもので、被葬者の埋葬時における祭祀の際に使用したと考えられている⁽⁸⁾。異形須恵器は朝鮮半島を中心に出土していることから畿内でも半島に関わりのある有力豪族との結びつきを考える上で重要な資料となっている。

沼田川下流域には巨石を使用した6世紀後半期の梅木平古墳^{ばいきひら}や御年代古墳^{みとしろ}や家形石棺の採用、奈良県檜隈寺と同類の瓦が出土し、7世紀中頃に建立されたとする本郷町横見廃寺など畿内の有力寺院や豪族の影響を強く受けている地域とされている。

集落遺跡は本遺跡以外に、松崎遺跡（久芳）で住居跡と思われる遺構と須恵器・土師器が出土している。他に、松崎ため池遺跡（久芳）では須恵器・土師器が工事中に出土しており、周辺には松崎遺跡や多くの古墳が分布している地域であることから大規模な集落遺跡が存在する可能性がある。また、遺物の包含地として正覚寺裏遺跡（久芳）、十文字南1・2号遺跡（久芳）、平が市遺跡（上竹仁）が確認されている。

なお、本遺跡の背後の丘陵上で、これまで知見されていなかった新たな古墳群（平原第1～3号古墳）を確認した⁽⁹⁾。（第2図）これらの古墳は、いずれも横穴式石室を埋葬施設としており第1・2号古墳が東に、第3号古墳が西に開口している。第1・2号古墳は丘陵頂部の平坦面中央を避け、やや東側に構築されている。第1号古墳は平坦面の先端付近にあたり、比高差が約15m背後に第2号古墳が立地している。両古墳とも円墳と思われるが墳丘は流失して石材がみられるのみで、石室内は埋まっているため規模は不明である。第3号古墳は第1・2号古墳の立地する丘陵の西側斜面が緩やかになる地点に立地している。規模は高さ約2m、径約10mの円墳で石室内は開口部付近の石材は無いが遺存状態は良いと思われる。

註

- (1) 広島県教育委員会「広島県遺跡地図Ⅱ」 1994年
- (2) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「金口古墳群」 1997年
- (3) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「日曾木遺跡」 2003年
- (4) 註(3)で杉風呂1・2号遺跡から石斧が出土しているとあるが、註(1)の名称に従い十文字南第1・2号遺跡としている。
- (5) 潮見 浩「広島県賀茂郡松の木古墳」『日本考古学年報』10 日本考古学協会 1982年
- (6) 福富町教育委員会「丁田南第3号古墳」 1994年
- (7) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「福富中学校裏古墳発掘調査報告書」 2001年
- (8) 河瀬正利「広島県出土の鳥形須恵器」『芸備古墳文化論考』芸備友の会 1985年
- (9) 本報告書への掲載については、地権者の方の了解を得ている。

3 調査の概要

川高遺跡は平成13年度に調査を実施した福原城跡に対峙する位置にあり、福原城跡の南側で沼田川と合流する支流の谷河内川に向かっておおきく入り込んだ谷頭付近の斜面に立地している。

調査前は棚田状の水田の南端上部にあたり、調査区内北側は水田造成時に削平を受けている。遺跡内の標高は約323m～326.7mで、調査区内で約4mの比高差があり、遺構は南から北へ傾斜する斜面に構築されている。

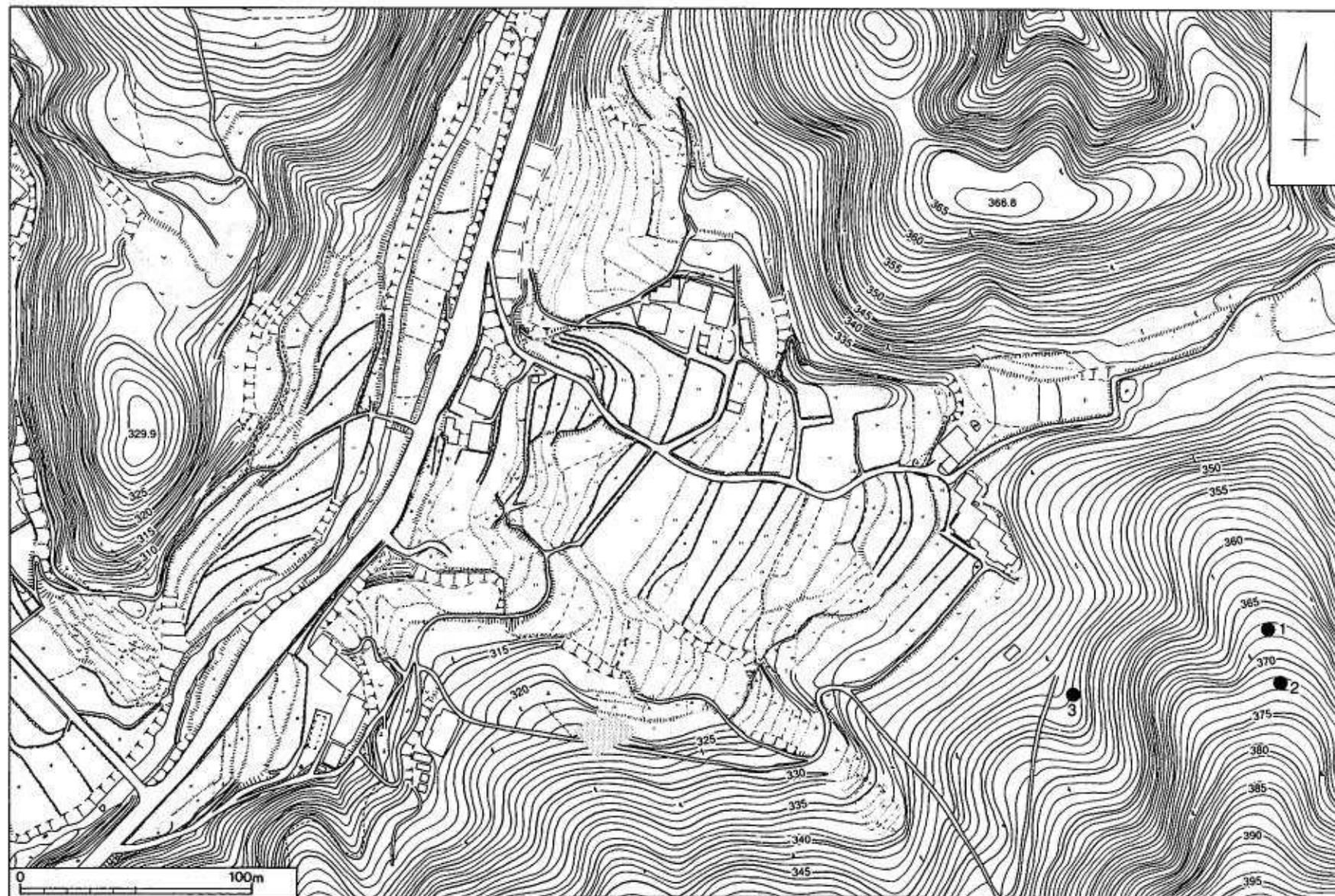
調査は試掘調査時の資料を基にして、道路工事時の廃土と表土を重機によって排土作業を実施した後に、人力による遺構検出作業と掘り下げ作業を行った。調査面積は300㎡である。

調査の結果、調査区内のほぼ中央で2基の遺構を確認し、調査前に道路法面で住居跡の可能性が指摘されていた落ち込みは溝であることがわかり、他に住居跡（SB1）を確認した。これらの遺構は、いずれも調査区の中央部に位置している。

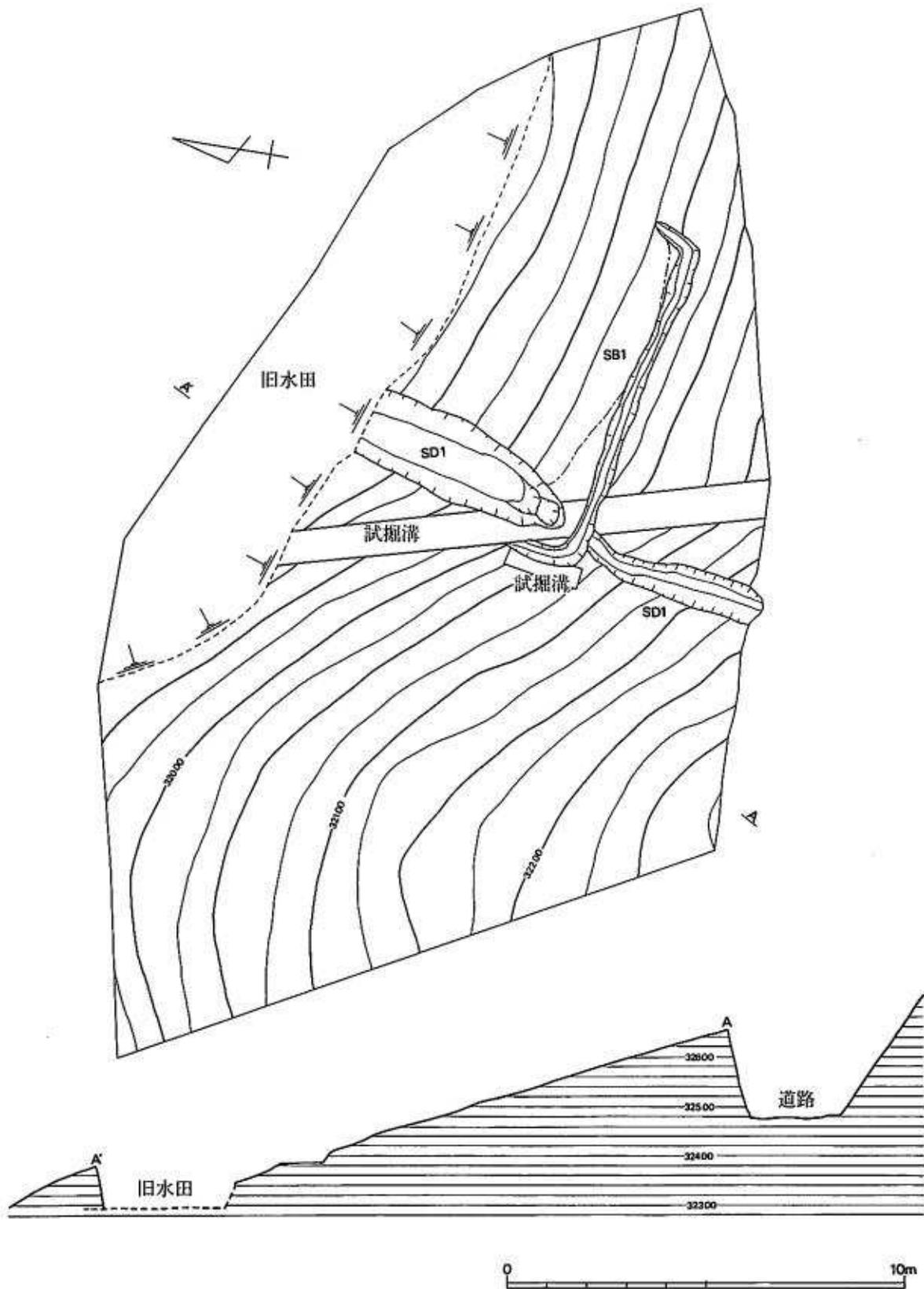
SB1は斜面に平行して東西約8mにわたり、幅50cm程度の壁溝が残っている。床面がほとんど流失しているため柱穴が確認できなかったが、床面は壁溝の西隅部分で幅が約2m残り、東側に向かって徐々に消滅している。平面形は溝の形状から方形もしくは長方形であったと思われる。SB1とSD1は重複関係にあり、土層の観察からSB1の方が新しい。

遺物は、床面と壁溝の境付近で土師器が出土している。時期は、古墳時代後半期と考えられる。

SD1は調査区の南から北へ流れる溝で、南側が幅約1m、北側で約2mと大きくなり底には部分的に砂礫が堆積していた。遺物は出土していない。



第2図 遺跡周辺地形図（1：2,500） アミ日は調査区，1～3は平原古墳群



第3圖 遺構配置図 (1 : 150)

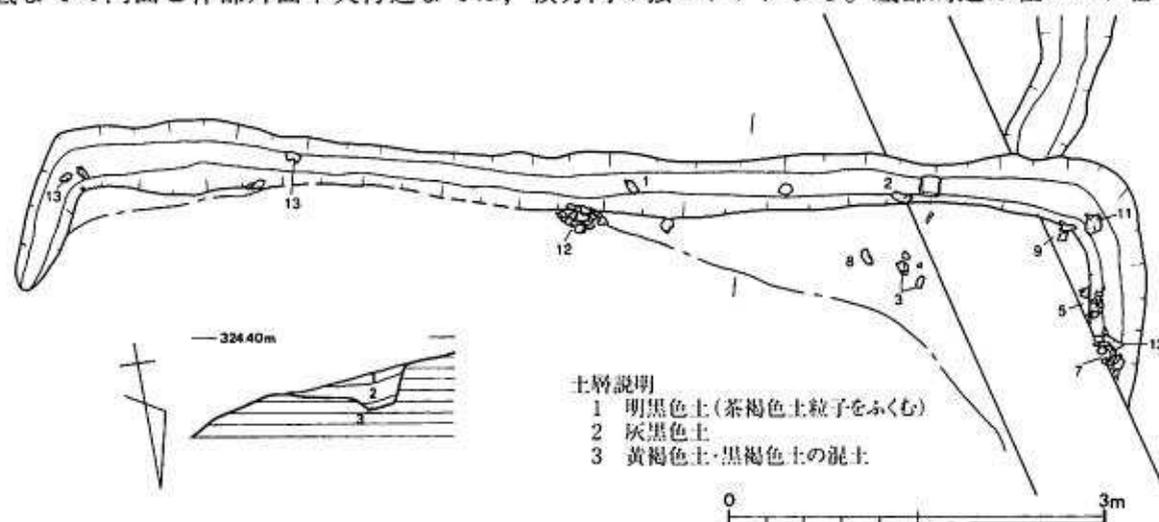
4 遺構と遺物

SB1 (第4図、図版2・3a)

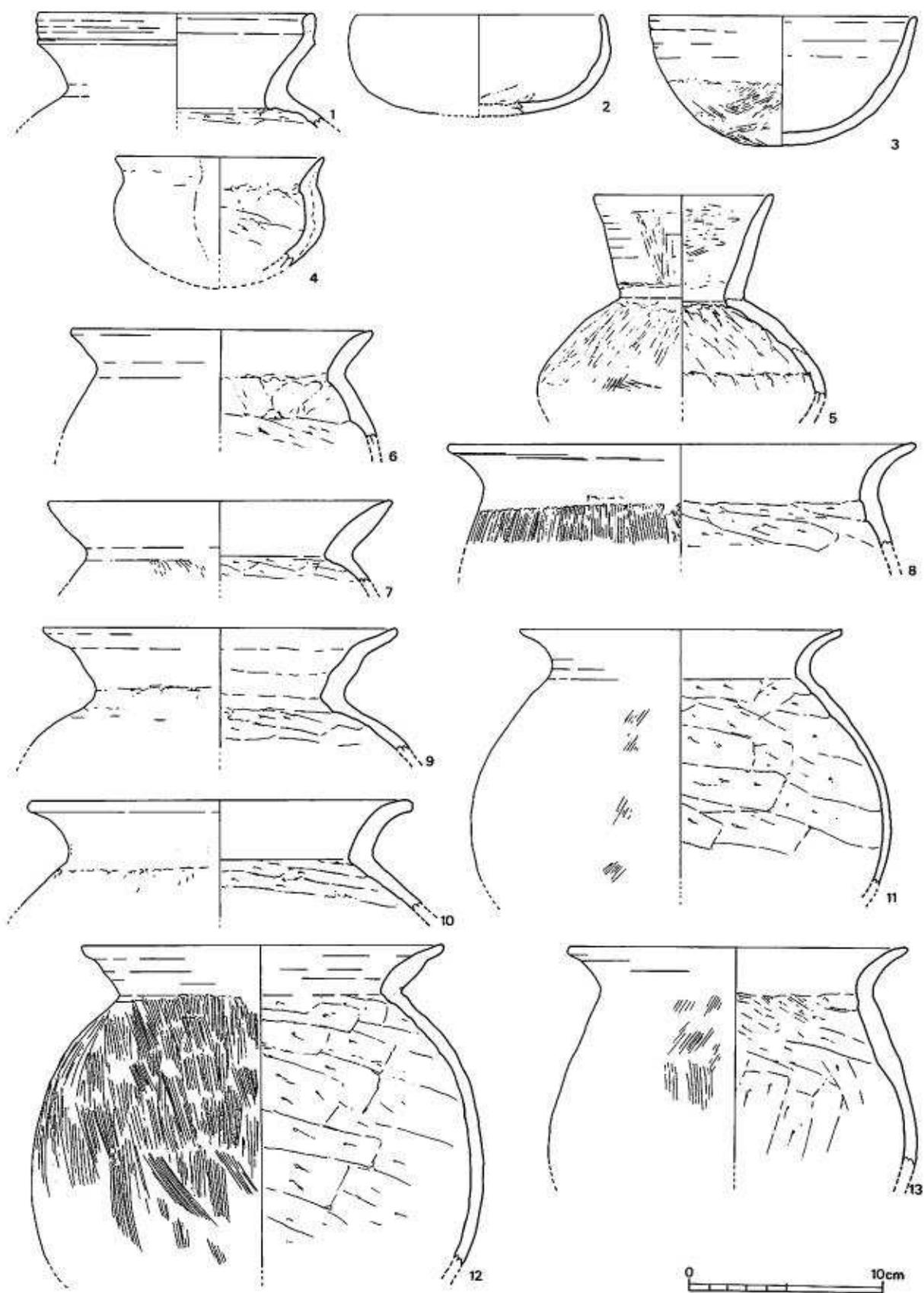
調査区内の中央に位置している。小さな谷状の傾斜地に立地しているため床面・壁溝とも流失しており、平面形・規模とも明らかでない。SB1の覆土は黒ボクとよばれる黒褐色土がベースとなり、遺構確認面の茶褐色土が混入している。西側は試掘調査時のトレンチにより部分的に攪乱を受けている。現存する規模は東西方向で長さが約8m、東側で約1m、西側が約2mの壁溝が残っている。平面形は方形もしくは長方形であった可能性もある。壁溝の幅は上端で50cm程度、床面からの深さは約10cmである。底面は緩やかに窪んでおり、小穴などは存在していない。床面は東側と西側の比高差はほとんど見られないが、東側で約20cmの幅、西側が幅約1mと僅かに残り東に向かい狭くなっている。柱穴は壁から1m以上離れ、深く掘り込まれていなかったのか、特に床面が残っている西側を目安として精査をしたが確認できなかった。遺物は流入と思われるものもあるが、ほとんどは住居に伴うものと考えられ僅かに残った床面と壁溝内から土師器・甕・椀が出土している。SD1とは重複関係にあり、土層の観察からSB1の方が新しい。

出土遺物 (第5・6図、図版5・6)

遺物は完形となるものが無く、反転復元し図化しているため数値は復元値で表している。また、1以外は土師器である。1は壁溝の覆土から出土した口径14.1cmの弥生土器の甕で、口縁部に凹線状の窪みが2条残っている。端部はやや面を残しており内外面ともに丁寧にナデで仕上げている。頸部の内面は強い左から右方向のヘラケズリがみられる。2は壁溝内底付近から出土している椀で、口径は12.6cm、残存高5.1cmで、胎土は精良である。焼成が悪く遺存状態が良くないが、内外面ともヘラ磨き状の痕跡がみえる。3は西側隅付近の床面から出土している椀で、口径が13.7cm、器高が6.7cmである。口縁端部は丸みがあるが、やや面を持ち内傾している。口縁部から底までの内面と体部外面中央付近までは、横方向の強いナデによる。底部周辺は粗いハケ目によ

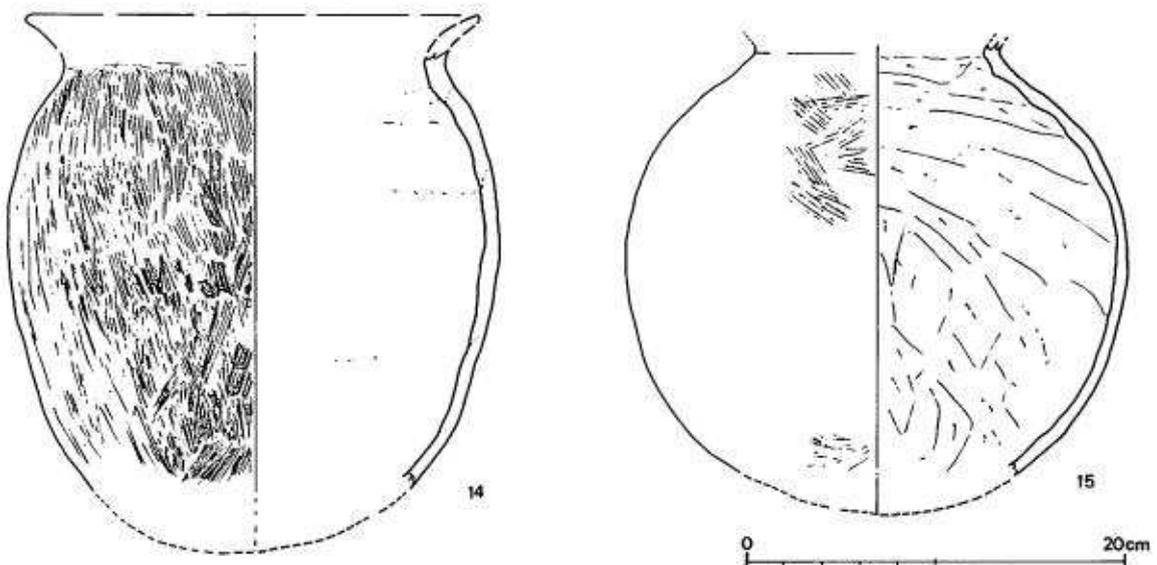


第4図 SB1実測図(1:60)



第5图 出土遗物实测图1 (1:3)

る調整の後、ナデている。胎土は若干、大き目の砂粒を含んでいる。色調は淡赤褐色を呈し他の土器と比べ特徴的である。4は東西方向中央付近の床面から出土している丸底になると思われる。口径が10.7cmで推定の器高は6.7cmで肩部から体部あたりに粘土を足しており1.0cmと厚い。粗い成形で、低部は左下から右上方向のヘラケズリがみられる。5は西側の壁溝に沿った床面から出土している。低部を欠くが直口壺と思われる。口径9.1cm、頸部径6.5cm、体部最大径15cm、推定器高16cmで、色調が淡赤褐色で3と同様に他の土器と比べ特徴的である。口縁端部は丸く収め、内外面とも丁寧にナデている。内面は頸部に絞り痕があり、下方から上方への強いナデが残る。体部最大径付近の外面にハケ目が残る。6～15は全て甕である。6は覆土中の床付近から出土している。口径が15.3cmで外面にススの付着がみられる。内面の左下から右上へのヘラケズリは頸部まで及んでおらず、指頭による強いナデが残る。口縁端部は丸く終わるが、外面が頸部から直線的に立ち上がっているのに対し、内面が緩く曲がっているため厚くなっている。7は西側壁溝の北端から口縁端部が下の状態で出土している。口径は17.5cmで部分的に二次焼成を受けススが付着している。頸部外面は縦方向のハケ目残り、内面は左下から右上方向のヘラ削りが残る。口縁部は頸部から膨らみながら立ち上がっているため厚みが1.2cmとなっている。端面は丸く終わっている。内外面とも丁寧にナデている。8は床面の西側で出土している。口縁は緩やかに外反しながら立ち上がり、端部は丸く終わっている。肩部は明瞭でなく外面に縦方向のハケ目が残っている。内面は頸部まで左下から右上方向のヘラケズリが、口縁部は内外面とも横方向を中止にした丁寧なナデにより平滑になっている。口径は23.6cmである。9は床面の西側隅で出土している。口径は18.1cmで、口縁部は頸部から緩く外反するが、端部あたりで更に外方へ開き内湾気味に丸く終えている。内外面とも強く丁寧なナデにより表面が平滑になっている。肩部は外面がナデ、内面は頸部あたりまで左下から右上方向のヘラケズリが頸部周辺はケズリの後にナデている。傾斜から見ると相当量の盛り土が必要となる。10は床面の西側から出土している。口径は19.5cmで、



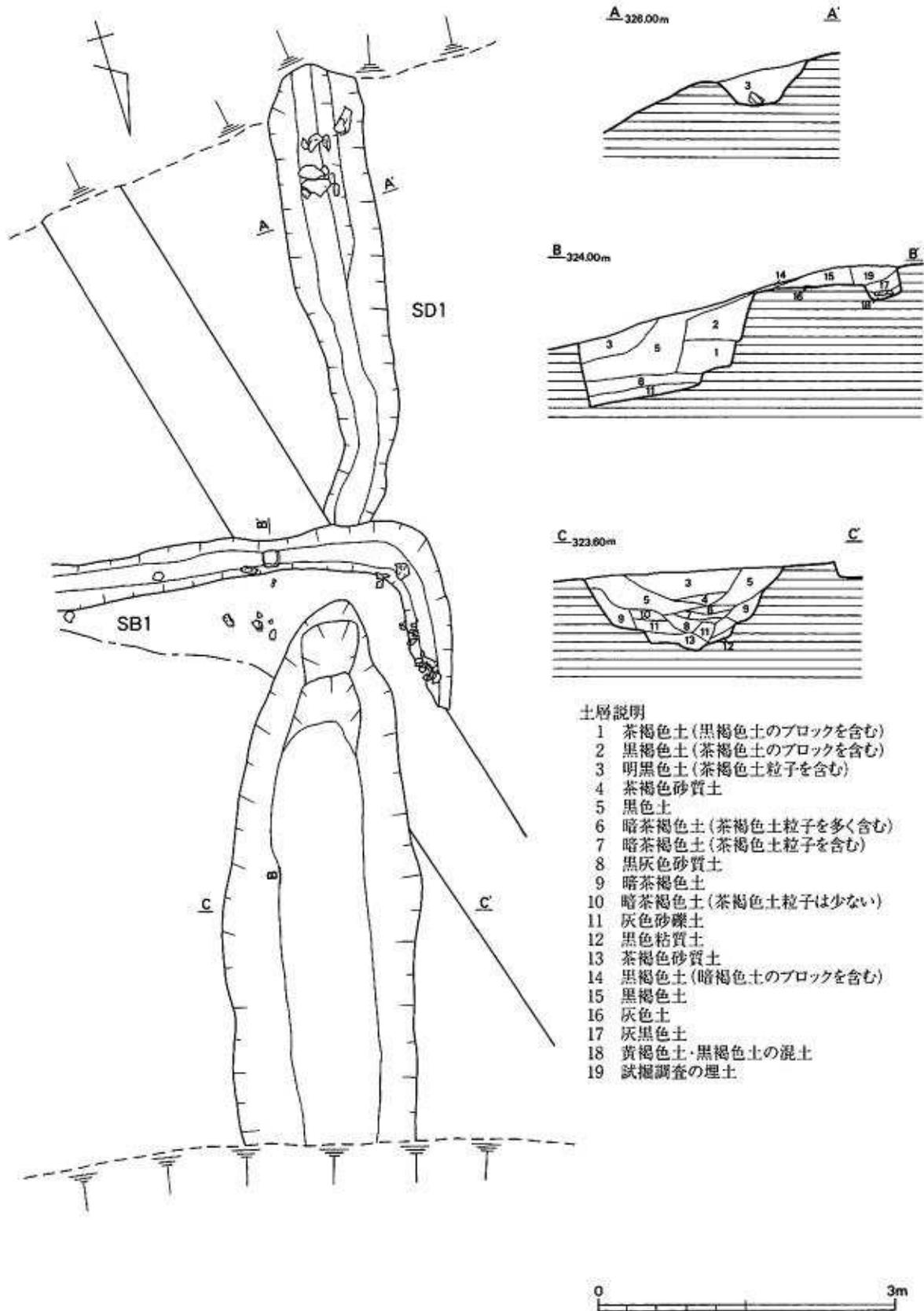
第6図 出土遺物実測図2 (1:4)

内外面ともに丁寧なナデ、肩部外面は縦方向のハケ目が、内面は左下から右上方向のヘラケズリが残る。11は壁溝の西側隅で出土している。口径は16.5cm、胴部最大径が21.8cmである。口縁部は外方に屈曲しながら立ち上がり、端部は丸く終わっている。胴部は球形に近く外面は目の細かいハケ目が残り、内面は左から右への横方向と右から左へのヘラケズリが頸部までみられる。外面には部分的にススが付着している。12は床面のほぼ中央の壁溝沿いに出土している。口径が18.5cm、胴部最大径が23.4cmである。胴部外面には縦方向に目の細かいハケ目が、胴部が最大となる下方では目はやや粗くなる。内面は頸部まで左下から右上方向のヘラケズリが残っている。口縁部の形状は9とよく似ており、端部周辺の外面が丸みをおびている。13は壁溝内東隅から出土している。口径は17cm、胴部最大径が19cmで、肩部が張らない形状は8と似ている。口縁部は内外面とも丁寧にナデで端部は丸く終わる。胴部外面は全体的にハケ目が残りススが付着している。内面は下半が下から上へのヘラケズリ、頸部周辺は左下から右上方向のヘラケズリが残る。14は西側壁溝あたりの床面近くから出土している。口縁と底部を欠いている。胴部最大径は26cmで外面は下半が細かいハケ目に対して上半は粗いハケ目となり、ススが付着している。内面は頸部で一部にヘラケズリの痕跡がみられるが、下半にはヘラケズリの痕跡がみられず指頭による成形の後、ナデで仕上げている。15は壁溝の西側で7と接して出土しているが同一個体ではない。口縁部と底部を欠いている。胴部最大径は26.5cmで、球状に丸い。外面は不定方向の粗いハケ目が残り、底部周辺は部分的にナデによりハケ目が消えている。内面は左下から右上方向のヘラケズリが残っている。

SD1 (第7図, 図版3b・c)

SD1は道路法面に落ち込みがあり住居跡とされていたが調査の結果、溝であることがわかった。SB1とは重複関係にあり、土層の観察からSB1より古い。溝は南から北へ等高線を斜行するように下っており、調査区内での差は約4mでかなりの傾斜である。溝の始まりは道路法面の反対側には落ち込みがないので、調査区近くからと思われる。北側は水田により削平されており不明である。溝の幅は南側で約1m、SB1付近で狭くなるが北側に向かって徐々に拡がり最大幅が2mとなる。深さも幅と同様に約40cmから80cmと深くなっている。

溝の底には砂礫が堆積しており水が流れていたのは違いないが、用途・目的は不明である。溝の最南部底付近には転落したような状態で角礫があるが、遺物は出土していない。



第7図 SD1実測図(1:60)

5 まとめ

川高遺跡では前章でみてきたように、竪穴住居跡と溝状遺構を検出した。ここでは出土した遺物から遺構の年代を述べるとともに竪穴住居跡について若干の検討を加えて、まとめをかえたい。

今回の調査で出土した遺物で図化できたのは、SB1から出土しているものである。1は覆土中から、その他は床面上あるいは壁溝内から出土している。調査区内の遺物も含めて1以外は土師器であり須恵器が全く出土していないのが特徴である。

ところで、当地域において須恵器の生産が開始されるあるいは出現する時期は明確ではないが、現段階では、金口古墳で出土しているものが古いと思われる。これらは陶邑の田辺編年⁽¹⁾でいうMT47からMT15までの時期とし、これは実年代では6世紀前半期とされている。須恵器が出土していないから、遺構の時期を須恵器の出現(生産)以前とするには問題があり、当事者が持ち得ていない可能性もある。後期古墳の調査結果によると普遍的に出土しているので、少なくとも6世紀後半頃からは普及し始めていると考えられる。須恵器と共伴する土師器は形態の変化が乏しくなり、土師器そのもので年代を特定することは難しくなるがSB1から出土している土器は甕が大部分を占め、完形となる資料はないが胴部が球体のものと長胴のもの2種は認められる。また、5の広口壺も特徴的である。これらの特徴は6世紀後半までは下らないと思われ類例を求めると、町内では金口第2号古墳から出土している土師器に求めることができる。第2号古墳の築造は須恵器がMT15相当とされており、6世紀前半にあたる。一方、東広島市ではあるが、大量の土師器が出土し遺物の分類がされている助平2号遺⁽²⁾と比べるとⅢ期の遺物と似ている。Ⅲ期は陶邑編年TK23相当とされ6世紀に近い5世紀後半にあたる。大まかな位置付けではあるが、ここではSB1の時期を5世紀代に遡る可能性もある6世紀前半期としておきたい。

SB1は斜面地に立地する竪穴住居跡であるが、一辺が8mと大規模になり、この時期の住居跡としては大型の部類に入る。一般的に傾斜地に立地する住居跡は、平坦面を造成する際に山側を削った土を谷側に盛ることによって平坦面を確保している。SB1の場合は8m四方分の土量を確保するために、削り出す部分を多くしなければならないが、現状では床面がほとんど流失していた。このことは、掘削量を最低量にするために平面が長方形であった可能性と柱穴は確認できなかったが掘立柱建物跡の平坦面であった可能性も表していると思われる。

福富町内では古墳時代の竪穴住居跡の調査は初めとなり、古墳と比べて様相は明らかでない。生産基盤となる背景は、谷水田だけの経営ではないと思われるが、現状では今後の調査の経過をみて検討しなければならない。

註

(1) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『金口古墳群』 1997年

(2) 田辺昭三『須恵器大成』 角川書店 1981年

(3) (財)広島県埋蔵文化財調査センター『西条第一土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(Ⅱ) 1993年

a 調査前遺跡遠景
(北から)



b 調査前遺跡遠景
(南西から)



c 検出状況
(東から)



a SB1遺物出土状況
(西から)



b SB1遺物出土状況
(北東から)



c SB1遺物出土状況
(北東から)





a SB1完掘状況
(北東から)

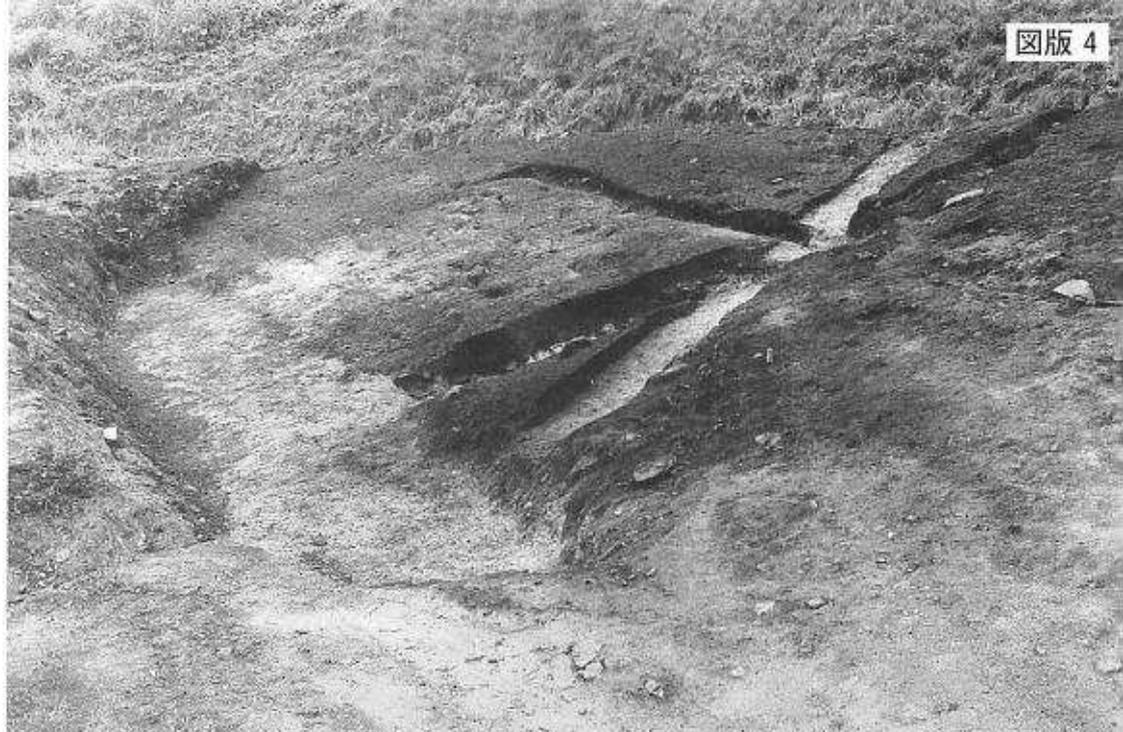


b SD1土層
(北から)



c SD1完掘状況
(北から)

a 完掘状況
(北西から)

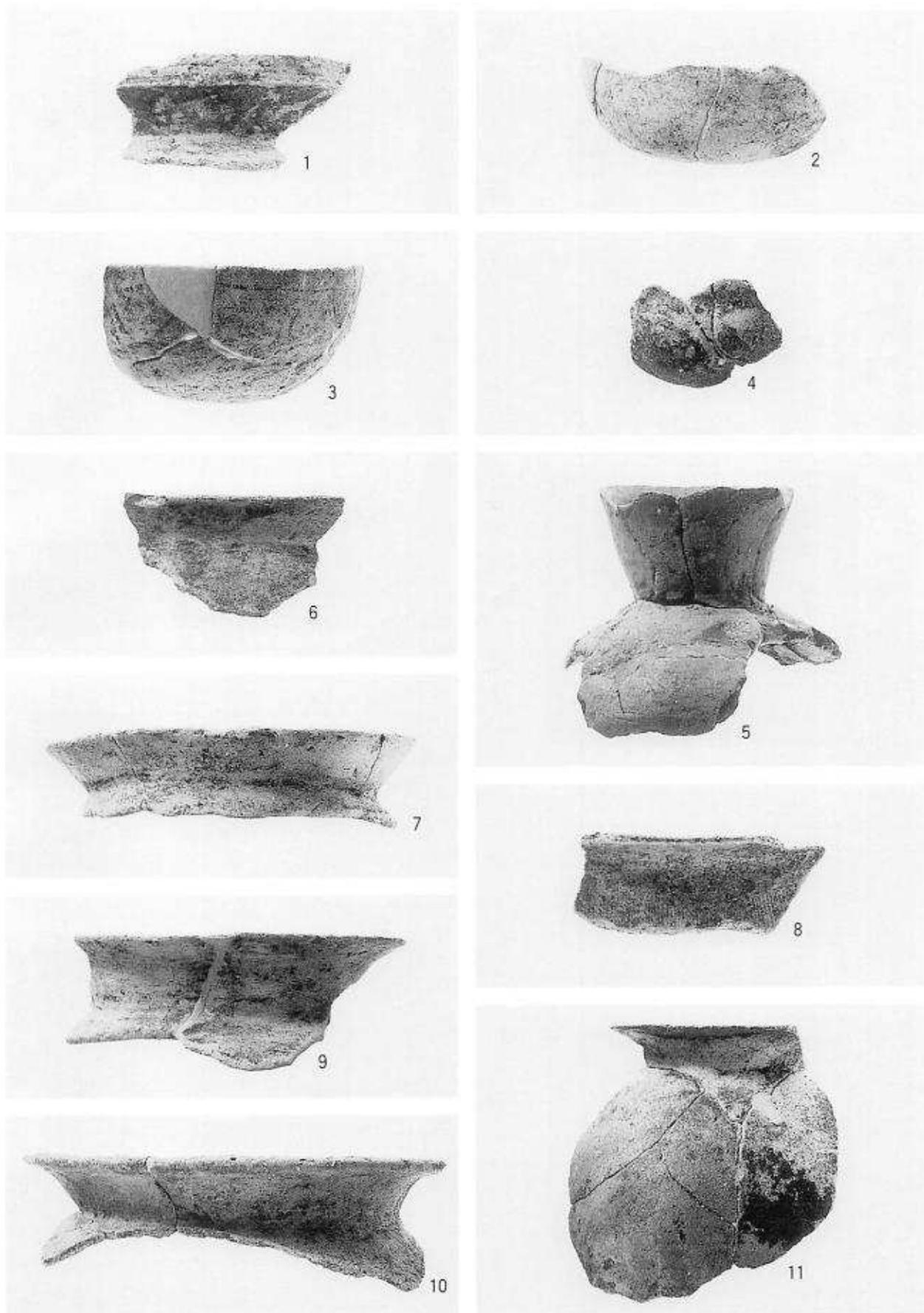


b 調査後近景
(南東から)

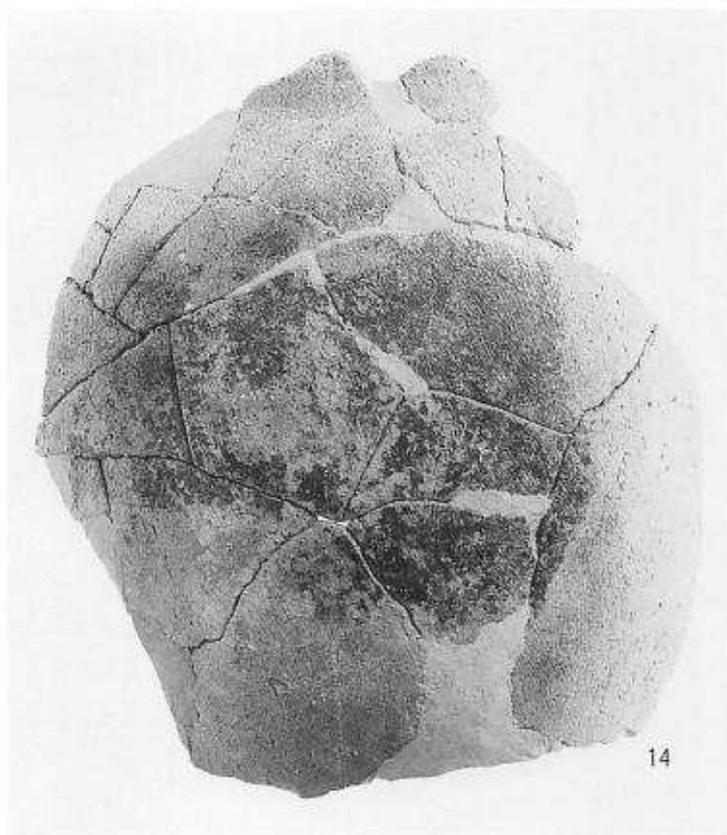
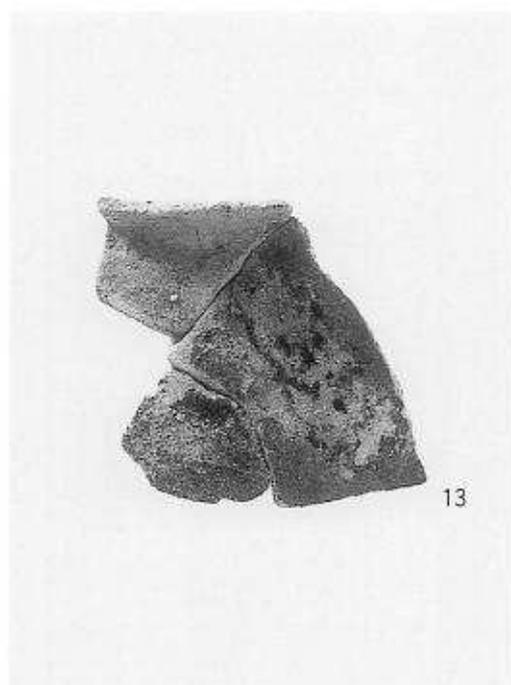
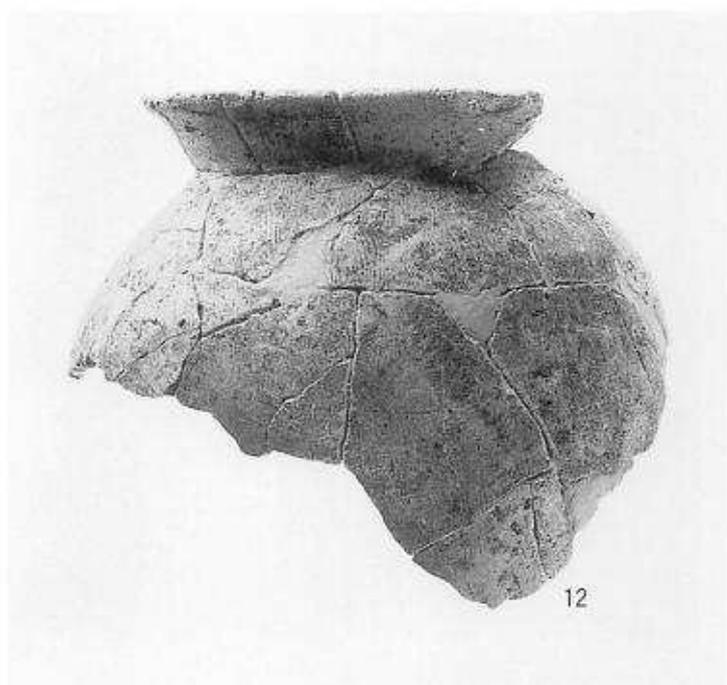


c 調査後遠景
(東から)





出土遺物 1



報 告 書 抄 録

ふりがな	かわたかいせき							
書名	川高遺跡							
副書名	沼田川河川総合開発事業（福富ダム）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	3							
シリーズ名	財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書							
シリーズ番号	第7集							
編著者名	山田繁樹							
編集機関	財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室							
所在地	〒733-0036 広島県広島市西区観音新町四丁目8番49号 TEL082-295-5751							
発行年月日	西暦2004年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″			
川高遺跡	広島県 賀茂郡福富町 久芳	34405	116	34° 31′ 40″	132° 46′ 43″	20030602 ～ 20030620	300	沼田川河川 総合開発事 業(福富ダム) に係る発掘調 査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
川高遺跡	集落	古墳時代	竪穴住居跡1軒 溝状遺構1条		土師器 (総量コンテナ2箱分)			

財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書第7集

川高遺跡

沼田川河川総合開発事業（福富ダム）に係る

埋蔵文化財発掘調査報告書（3）

発行日 平成16（2004）年3月31日

編集 財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室

〒733-0036 広島市西区観音新町4丁目8番49号

TEL(082)295-5751 FAX(082)291-3951

ホームページ <http://hmaibun.d-net.co.jp>

発行 財団法人広島県教育事業団

〒733-0011 広島市中区基町4番1号

TEL(082)228-8451 FAX(082)228-8441

印刷所 西日本印刷株式会社